

犬のアトピー性皮膚炎の検査方法

犬のアトピー性皮膚炎の診断は、①病気を示唆する既往歴があること、②典型的な臨床症状があること、③鑑別診断が除外されていること、によって行います。アトピー性皮膚炎の診断は、アレルギー試験陽性が必須との誤解も多くあり、この試験で判断している動物病院があるのも事実です。しかしこれは間違いです。皮内反応試験、血清アレルギー特異的IgE抗体試験は共にアレルギーを特異的に診断するものではなく、皮膚や血液中に特異的IgE抗体が存在していることを検出しているだけです。ただし、上記の①②③によりアトピーと診断された犬にこのような検査法を行い、アレルギーの種類を把握することは、生涯の管理にとって有益だと考えられます。

ここでは、検査法に重点を置いて書いてあります。犬のアトピー性皮膚炎の全体像に関しては、別項目の「犬のアトピー性皮膚炎」をお読み下さい。

アトピー性皮膚炎の定義

人のアトピー性皮膚炎は「慢性に経過する痒みおよび炎症を伴う皮膚炎で、多くの場合アトピー性素因を有する」と定義されています。アトピー性素因とは、低容量のアレルゲン(抗原)に反応してIgEという抗体を産生しやすい遺伝的な体質の事を示します。犬の場合も同様に遺伝的素因が関与する痒みを主とした皮膚炎と考えられ、IgE抗体やIgG抗体の産生異常に起因する慢性皮膚疾患と理解されています。ただし、人と犬では異なる点も多くありますので、全て同様とは考えないで下さい。

アトピー性皮膚炎の検査方法

現在、アトピー性皮膚炎は、人犬のどちらにおいてもIgE抗体の関与があることは明らかにされています。そのため、この抗体を用いた検査が数種類ありますが、犬において行われているのは、皮内反応試験と血清アレルギー特異的IgE抗体試験になります。

①皮内反応試験；各種のアレルゲンを皮内に注射して、紅斑が出るかを見る試験です。この試験は、皮膚におけるIgE抗体の反応を見ているので、血清アレルギー特異的IgE抗体試験よりアレルゲンに対する特異性が高いと考えられています。しかし、現在、日本には犬用のアレルゲンがなく、海外から個人輸入しなくてはなりません。そのため、開業獣医師では実用的ではなく、一般的に行われていません。

②血清アレルギー特異的IgE抗体試験；各種アレルゲンに対する血液中の特異的IgE抗体を検出する試験です。例えば、チリダニに特異的なIgE抗体が血液中に存在するか、そしてその量はどの程度か、を調べる検査です。採血するだけで検査できるわけですから、臨床家にとっても動物にとっても楽な検査です。ただし、この検査の問題点は過剰な擬陽性反応です。本来は関係のないアレルゲンも陽性と出てしまうことです。また、逆に陰性の場合にもアトピー性皮膚炎である可能性もあります。それだけ特異性に欠けるのです。ですから、最初に書いたように①病気を示唆する既往歴があること、②典型的な臨床症状があること、③鑑別診断が除外されていること、によりアトピー性皮膚炎の診断がある程度ついた犬において用いて始めて意味がある検査になります。

現在、日本では犬の血清アレルギー特異的IgE抗体試験を行っている検査機関は、5社くら

いありますが、感度は様々です。当院では、アトピーの疑いのある犬と全く問題のない犬の血液を各検査機関に出し、比較検討してみました。その中の3機関は相関性がありました。中には擬陽性反応がひどく、問題のない犬も多くの陽性結果が出た検査機関もありました。利用する機関を選ばないと全てアトピー性皮膚炎と診断されてしまう可能性があるのです。

現在、当院が一番信頼している検査センターは、サルーンです。ここの検査方法は、上記5社とは違う方法を用いています。アラセプト(方法論は省略します)という方法ですが、感度・特異性共に優れています。擬陽性の発現頻度も非常に低いため、臨床において優れた情報を提供してくれます。

③血清アレルギー特異的IgE抗体試験と食事性アレルギー；食事性アレルギーは単独での発生もありますが、アトピー性皮膚炎の動物は食事性アレルギーを併発していることがよくあります。そのため、アトピー性皮膚炎の動物は食事にも注意する必要がありますが、問題は食物アレルギーを「血清学的アレルギー特異的IgE試験」で診断できるかどうかです。答えは「No」です。食物アレルギーは、腸管の粘膜で生じるIgE抗体の反応で、この現象は血液中のIgE抗体にはほとんど反映されません。全世界的に、皮膚科の研究者および専門医は「血清学的アレルギー特異的IgE試験は食物アレルギーの診断には役立たない」と主張していますが、多くの検査機関は食物アレルギーパネルを提供しています。原理を理解していない動物病院はその結果をそのまま飼い主の方へ伝えますので、その結果を信じて、米だけしか与えていない飼い主の方もみえました。当然ですが、動物は非常に弱っていましたし、結果としてその動物に食事アレルギーはありませんでした。食事性アレルギーは、今まで食べさせたことのない蛋白源による食事を2ヶ月間続け(除去食試験と言います)、皮膚症状が治ったら、問題のありそうな蛋白源を与え、痒みが生じるかを観察し診断します。